

「更なる共育と響育と驚育の実現のために」

——自分の感情に気づき、自己決断し、自分を信じる事が出来る教育めざして——

園長 高杉美稚子

さわやかな春風とともに新しい年度がやってまいりました。ご入園、ご進級を心よりお喜び申し上げます。

何もかも新しい仲間が増え、一番大変な時期でしょうといわれますが、子ども達も、教師も、親も最も成長することが手に取るように見ることが出来る私の一番大好きな季節です。桜が咲き乱れ、何だか心がワクワクするような、心改まるそんな4月です。

今、園児たち、保護者の皆様、先生という、素晴らしい吉塚幼稚園の仲間がめぐり合ったことに心から感謝致します。少し大人びた進級生、新しい園児たち、保護者の方を迎えて、そして職員と共に歩き始める新年度のスタートです。胸にいっぱい希望があられてくるような感じがします。皆様のおかげで平成18年度を迎えるにあたり、今日ここに新年度がこの仲間スタート出来る事を心よりうれしく思い、感謝申し上げます。

今年はこのメンバーであることの必要性がきっとあるはずです。だから、この仲間であったことに感謝して、自分に謙虚に精一杯生きていきたいと思います。

今、教育で最も大切にされていることは『生きる力』です。では本当の生きる力とはなんのでしょうか。生きる力とは、逆境をはねのける力です。

逆境が人生のばねになることを、大人は子どもに教えてあげる必要があります、自分自身も常に確認しておくことが大切です。逆境が人生を輝かせるのです。「麦ふみ」というのがありますが、麦は踏むから育つのです。その一番は生きる基本を知ることです。

仏教用語に「守破離」という言葉があります、

1. 「守」とは師の教えをそっくりそのまま守る事。一切師の教え通りにやる。それ以外のやり方は許されない。これは師が長年修練に修練を重ね一つのものを築きあげて来ているわけである。ゆえに経験のない者が批判するのは間違いである。先ず最初は、師が「どのような修練のもとに、どのような考え方どのような態度、姿勢をもっているか」をそっくり学ぶ。言われた事に違反しない。これが基本である。
2. 「破」とは、師のものを自分のものにした上で、そこに自分の新たな工夫、努力を加え「師の教えから少しずつ抜け出し、脱皮していく段階。
3. 「離」とは、自分の工夫、努力により師の教えから逸脱し、さらに修練を加え、自らが一つの境地を築き上げる。という意味である、といわれています。

まずは決まりを守る。先人の教えを守る。そして、それが出来て初めて「型」を打ち破ってごらんというのが個性教育です。人間は、一度は「型」にはめる必要があるのかもしれませんが、どうして「型」にはめる必要があるのかというと「型」とは基本的な人間の生き方の姿勢であるからです。

狼にそだてられた「アマラとカマラ」は発見された後、どんなに愛情を持って育てても、人間になれなかったという記録がありますが、人間として育つ時に人間として育たないと人間にならないのです。だから、基本的な人

間としての生き方、が必要なのです。欲望を満たすことと抑制すること、皆が席を立ていけないときは席を立たない、感謝する「有難うございました」という型は人間として生きる基本です。

特に最近ではしてもらって当たり前、ちょっとでも気に入らないと文句をいう、まず感謝するという姿勢が足りない気がします、感謝するという型は人間として一番の生きる基本であるはずで。

型にはめられながらも個性は出せます。いや、型こそ個性です。なぜなら、型の窮屈さを知ったから初めて個性が出るからです。料理をする時もそうでしょう。必ず味付けの基本があります。良く言われる所の「さしすせそ」砂糖、塩、酢の順番ですね。

色を組み合わせる時にも基本があります。同系色、これは同じ色に、クロ、シロ、グレーを混ぜた色、類似色とは、色相環の両隣の色、補色とは、反対の対称色の事ですが、この組み合わせは合うと言われています。味つけにしろ、色にしろ、ルールがちゃんとあるわけですね。

プロの方が変わった、奇抜な事をされる場合にもこのルールはちゃんとわかって、それに少しアレンジしているのであって、ルールを知らないとか、まったく無視している所からは、人が心地良い、おいしいと言う事は生れてこないわけです。

だから、今一度、生きる基本、厳しさも含めて子ども達に教えてほしいのです。親も教師も。特に親が厳しさを教えることが困難になっている時代です。もちろん厳しさと優しさの適度な密着が大切なのは、教師は承知しておく必要があります。

そして、やさしいことは厳しいこと、厳しいことはやさしいこと。だからこそ、その上で親や教師には勇気を持って厳しさに取り組んでもらいたいのです。そしてそのことが、厳しさになるか、やさしさになるか、効果上がるかあがらないかは、適時、適量を持った言い方になるでしょう。

どんなにすばらしい薬も、適時、適量を間違えると大変なことにつながります。どんな言葉にも致死量があるということを覚えておきましょう。眠れない時に飲む安定剤でも、量が過ぎれば死ぬ時もあります。

こちらの言う事が、どんなに正しくても、その量と濃さとタイミングが一致しなくては、相手の心を殺してしまう事があるということを考えて行動しましょう。

だからこそ、吉塚幼稚園の教育があるのです。新学期にあたり、今一度教育方針の確認をしていただきたいと思います。

★吉塚幼稚園で目指す教育の三つの柱★

- 1 に「真の自立への道なり」(個別性と共感)
- 2 に「知ることの喜びを与えることなり」
(自己成長の継続と問題解決能力)
- 3 に「感動と思い出を作ることなり」
(生命の尊重と危機管理能力)

★三つの教育の根幹★

- 1、**共育**—自立への援助として、子どもと同じ目の高さになって、同じ純粋な心をもって、子どもを取り巻く教師が、保護者がともに育つ「共育」、
- 2、**響育**—感動と思い出を持って心と心が響きあう、子ども同士、大人同士、子どもと大人が、それぞれが問い掛けたことがかえってくるそんな「響育」
- 3、**驚育**—知ることの喜びは、驚きと発見の連続を育てる「驚育」でありたいと考えます。

そしてこれがないと5つの過ぎたるかかわりが起きます。

大人の5つの過ぎたるかかわりの結果起こること

保護とは、子どもが望んでいることを、望んでいるときに、望んでいるだけ与えること、
過保護とは、子供は望んでいるけれど、子どもが自分でやろうとすれば、十分できることまで、安易にこちらが手を貸してやってしまうこと、
過干渉とは、子どもが望んでいないことやりすぎたり、やらせすぎたりすることです。
過期待とは、子どもが自分に期待するのではなく、子どもが出来る以上に親が望むこと
過放任とは、子どもが望んでいる以上に放任する事
過許可とは、子どもが望んでいないのに許可を与える事

この5つに共通する特徴の第一は、愛と注目、承認の不足や欠如、二番目には**選択や決断の大部分に大人がかかわること**で、**子ども自身の「授受の喜びや挫折の体験」が少ないこと**にあります。

本当に自分が何をしたいのか、何を望んでいるのか、自分でわからなくなります。相手の反応だけを見てしか行動が取れないと、相手の承認を求めて、どういふ答えが正解か、相手が望む正解だけを求めて、褒められる答えだけを求めて、苦しむことになります。

だから、「5つの過ぎたるかかわり」が怖いのです。特に過干渉のつけは青年期などのあとになってやってきます。この5つの過ぎたるかかわりのために、真綿でしめつけられるように子どもは自分をなくしてしまうのです。

この5つの過ぎたるかかわりを打破する方法が「セルフコントロールできる子どもに育てること—自己決定能力のある子どもにすること」にあると私は考えます。そこで、決断の教育の循環が大切になってくるのです

吉塚幼稚園が考える教育の循環

「**自己選択→決断→承認→自信→自他分離→個別性→共感→自立**」の教育の循環を通して、真に自立し、自分の事が大好きな子ども達を育てていく「**自分が大好きで、自分が信じられる**」教育です。

この教育は、日々の保育だけでなく、子ども達が自ら選択、決定し、自己承認が出来る**自主選択保育「ドリカムタイム」**や子ども達の感覚の鋭敏性、創造力、考える力、柔軟性、感性を培い、視野を広げる、あそびの自由広場「キラキラタワー」でのその年齢に不可欠の子ども達の望ましい成長と発達を促す教育でもあります

子どもが自分で決めるということはとても大切なことで、いつ自分で決めるのかも含めて子どもに任せて待っていてあげるところに子どもの自主性が育ちます。

自分で自分を律する（セルフコントロールできる）ことが出来れば、人は切れません。自分で決めるためには、

「小さくても自分にとって大切なことを、自分の感情に気付いて、自分で決めるという体験が必要」です。いつするかも含めて、自分で決めていいとなると、自分の衝動や欲求を抑制したり、先延ばしにしたり自分で出来るようになって行きます。

この「セルフコントロールできる子どもに育てることー自己決定能力のある子どもにすること」の課題は、友達とのかかわりの中で育つことがもっとも大切です。それが三つの友達とのかかわりです。

本園の三つの友達とのかかわり

- 1、「私は私」という自分の存在の確立
- 2、「私とあなた」という二者の関係、共に生きるということ
- 3、皆の中の自分という存在

そしてこのかかわりの中で起きる人間間の葛藤は[心の教育]で対処することが大切です。

「心の教育とは」ルールを教えるのではなく、なぜそうしないといけないかという気持ちを教える事ではないかと考えています。

「片付けることが大切」という事を教える事が教育ではなく、片付けると気持ちが良いという気持ちを教えるのが心の教育です。この気持ちが理解できない限りしつけも子どもの心と体の中に定着することはありません。なぜそうしたほうが良いのかを子ども自身に感じてもらうことが心の教育です。「なぜ」を教えないとルールだけを守る人間になるのではないのでしょうか。

『心』を教えないで社会のルールだけを教えると、その人は間違った努力をしてしまうことになります。

もし、子どもが、その事に気付かないで、ただ親や他人の承認を得ようとして言いつけを守るとすれば、その意味がわかっているのではなく、怒られるのが嫌だからしているのであって、理解しているのではないのです。

又、自分のことをわかってくれた時の、ほっとした体験をした時の気持ちが子どもの心を育てます、気持ちよいという心、感情、心地良さを育てる事によって心が育つのです。

全ての教育は子どもが自分の心に躍動するものがなければなりません。そしてその気持ちをわかってくれた人の言う事を人はきくのです。大人でも自分の気持ちをわかってくれない人の言うことを聞けますか？子どもはもっと敏感です。

そして、子どもが自分の気持ちに素直になり、かかわりの中心になった時に初めて心の教育が出来てくるのではないのでしょうか。先生や友達と心をひとつにすると気持ちがいいと感じること、子どもは親、教師や友達とかかわることで自分の存在を確認していきます。

園や家庭生活を通して、子どもは自分の心に修正を加えながら、「最後まであきらめない心、苦しくても悲しくても、つらくてもそれを乗り越えていく心」を会得し、自分が自分であるというアイデンティティーを確立していくのです。それが『育てる』つまりは『自ら育つ』ということなのです。

このことの理解なくして、適時、適量の言葉かけは出来ません。また「あなたメッセージ」―相手の行動を言う一ではなく[私メッセージ]―自ら感情に気づいて言葉を発することによってさらに共感が高まります。

このような親、教師、子どもの関係が築けたときその集団はきっと成長していくのでしょう。

最初から立派な人間はいないように最初から、一人前の親も、教師もいません。でも、一人一人の力は小さくとも、一人一人は自信がなくても、皆で力をあわせればきっと素晴らしい事ができます。

一人一人が助け合えば、勇気が湧いてきます。今の自分は未熟に思えても、その時、その時を精一杯生きて努力をしていけば、その時々ですべての人が「100点満点」なのです。それは、子ども達も、親も、教師も皆同じです。皆が、自分を認められる、そんな育ちをしてほしいと願っています。

だから恐れることは何もありません。行動を恐れ、結果を恐れ、何もしないのは、停滞退化でしかないと私は考えます。人が、呼吸をし、生きているということは、何の成長、進歩もない人生を過ごす為ではありません。

そして、最終的に、子ども達が、自分が人の評価ではない、自分の中のもう一人の自分が自分を認めてあげる日、真の自立の日が迎えられる日まで頑張りましょう。そんな幼稚園を共に作りましょう。

この実現のために教育理念があり教育目標があります。この実現のために、どうぞ、手を取り合っていきましょう。かわいい子ども達の為に。次世代のために。それは、とりもなおさず、人間として自己成長につながります。

前を向いて歩くことが大切です。失敗したら、そこで学べばいいのです。次にどうしたらよいか、考えればいいのです。怖いのは、失敗を恐れて一歩を踏み出せないことです。迷いながらも、勇気を持って挑戦する事は、人を成長させます。

『情けは人の為ならず』、結果として、自分にすべてかえってきます目の前の事柄や手段や結果のみにふりまわされず、問題の奥底にあるものに目をむけていきましょう。すべては、プラス思考です。

又、感動と思い出は誰も作ってくれるものではありません、自分の手で作るのです。感動と思い出は、子ども達に、教師に、保護者にその人がそれぞれの立場で、精一杯頑張った分だけ平等にかえってきます。

今年一年、子ども達、保護者の方と共に歩き、驚き、響きあいながら、共に育ちたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

全託

すべての問題を解決する能力はすべて自分自身が持っている。その事を信じて、自分の持てるすべての資質を信じて、すべてを自分自身にたくしてみよう。

すべてはそこから始まる。